

# 自由主義神学におけるルター研究

—— 歴史的考察の始まりとその限界 ——

村 上 み か

## 1. はじめに

近代は、信仰の自由の保障と政教分離の原則をもってヨーロッパにおけるキリスト教会のあり方に大きな変更をもたらした。すなわち、それは一方では、中世以来の国教会制度の終わりを意味し、キリスト教会の強固な基盤の崩壊を帰結することになった。その一方、それは国教会の信仰告白の強制からの解放を意味し、信仰の自由とともに思想、表現の自由が保障されることにより、多様な思想潮流の展開と学問研究の大きな発展が促進されることになった。このような社会環境の変化は神学の領域にも大きな影響をもたらした。宗教改革期以来の信仰告白、すなわち教理を基礎にした教派神学の枠にもはや規定されない、自由な思考に基づいた開かれた研究が進められ、特にこれは聖書学の領域において大きな成果をもたらすものとなったことは、周知のとおりである。

信仰告白や教理から自由にされた神学研究のあり方は、キリスト教の歴史、とくにルターや宗教改革の研究にも大きな変化をもたらした。本論文は、このような近代の状況下に始められた「学問的」ルター研究の展開を追い、その成果と問題点を明らかにすることを目的とする。

具体的にはリッチェル以来の自由主義神学を取り上げ、そこで提出された近代的学問方法に基礎付けられた歴史的な考察の方法と、それに基づいて提出された新しいルター理解を明らかにする。一方、この新しい研究のあり方は、その根底にある近代的な問題意識に規定され、その歴史的考察は徹底したものとはなりえなかった。そしてまさにその近代性ゆえに、これらの研究は弁証法神学による批判を受け、ルター研究における歴史的考察は、その後、長きにわたって後退を余儀なくされることになる。19世紀後半からのわずか数十年の間に進められたこれらの新しい研究は、しかし1960年以降、弁証法神学を克服しようとする教会史家たちによって再評価され、その後大きく展開する宗教改革の「歴史研究」の基礎を築くものとなった。以下、自由主義神学の提出した新しいルター研究を、リッチェルとリッチェル学派、トレルチ、ホルにおいて取り上げ、彼らの歴史的考察を分析する。

## 2. 自由主義神学におけるルター研究の背景： 19世紀前後の多様なルター解釈

自由主義神学におけるルター研究を論じるにあたり、彼らの問題意識とその研究の意義を明らかにするために、まず彼らの周囲にあった当時のルター理解、すなわち19世紀前後に見られたルター解釈について言及しておきたいと思う。前述のように、近代においては多様な思想潮流が花開き、それぞれが自己の視点からルターを解釈し、その結果、多様なルター理解が社会の中に存在していた。新しいルター研究は、その中であって、自由な姿勢をもちつつも、「神学的」にルターと向き合おう

とする試みであったことが、以下の叙述により理解されるだろう。

信仰の自由の保障によりキリスト教の強固な制度的基盤が失われた後も、ルター自身は、その評価を失うことはなかった。むしろ世俗化しつつある社会の中で自己に引き付けた思想的、政治的理解がなされることにより、これまで以上に親近性をもって受け入れられた様子が、以下の叙述により伺われるだろう。

当時の社会において何よりも大きな影響力をもったのは、啓蒙主義によって提出された「解放者」としてのルター理解である。すなわち、ルターは聖書に立ち帰ることにより、中世の迷信と信仰の束縛を退け、教皇主義からの解放、さらには良心の束縛や伝統からの解放を成就した、と理解されたのである。それによって、ルターの宗教改革は一啓蒙主義の概念であるところの—「理性」と「人間性」、そして「キリスト教的良心の自由」を獲得するための戦いであったと理解されることになる。そして、このルターの解放の働きからさらに「学問の自由」や「国家や教会における寛容」の概念が派生させられ、ルターは自由のための戦士であり、偉大な精神的英雄であったと表現されたのである<sup>1</sup>。

古典主義においては、とりわけドイツ語という言語的観点からルターの評価が高められた<sup>2</sup>。ヘルダー（ヨハン・ゴットフリート、

<sup>1</sup> このような啓蒙主義のルター理解を表現したものとして挙げられるのは：Lüdke, Friedrich Germanus, *Über Toleranz und Geistesfreiheit*, 1774. このテーマについては、以下の研究を参照：Bornkamm, Heinrich, *Luther im Spiegel der deutschen Geistesgeschichte*, Göttingen 1970, S. 16-18.; Mostert, Walter, *Luther III*, in: *Theologische Realenzyklopädie*, Bd. 21, S. 567-594, ここでは S. 571f.; Lohse, Bernhard, *Martin Luther. Eine Einführung in sein Leben und sein Werk*, München 1982, S.220,222.

<sup>2</sup> Bornkamm, *Luther im Spiegel*, S.19-30; Mostert, *Luther III*, S. 572f.; Lohse, *Martin Luther*, S. 222-224.

Johann Gottfried Herder) やゲーテ (ヨハン・ヴォルフガング・フォン, Johann Wolfgang von Goethe) はルターの聖書翻訳や説教, 詩作における優れた才能を評価した<sup>3</sup>。さらに, ヘルダーは当時まだ新しい天才の概念をルターに適用して, 彼を宗教的英雄とみなし, あるいはドイツ民族の宗教との関連でルターを理解するという民族史の視点をも打ち出した。

一方, 観念論は精神史との関連でルターを把握することを試みた。これは, とりわけヘーゲル (ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ, Georg Wilhelm Friedrich Hegel) に見られるものである<sup>4</sup>。彼も啓蒙主義と同様に, ルターをまずは人間の自由という観点から評価するが, その際, ルターの自由理解を「主観性 (Subjektivität)」の概念をもって説明しようとした。すなわちルターの主張する自由とは, 主体が実体的真理 (die substantielle Wahrheit) に対して自己の固有の本質 (seinen partikularen Inhalt) を放棄し, この真理を自己のものとする, 主体自身が真実の存在となり (ein wahrhaftes), 真実に対して自由となるもの, と理解する。そして, ヘーゲルはここに精神の概念を適用し, これは神の精神を感得する主観的精神 (der subjective Geist) が神の精神そのものとなった状態であると説明した。そして, このキリスト

---

<sup>3</sup> ヘルダーのルター理解は以下の著書に示されている: Von der neuern römischen Literatur, 1767; Von deutscher Art und Sprache, 1773; Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit, 1774; Luther, ein Lehrer der deutschen Nation, 1792. ゲーテのルター理解は手紙や対話の中に見られる。その抜粋は以下を参照: Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 215-219.

<sup>4</sup> ヘーゲルのルター解釈は以下の著作に示されている: Religionsphilosophie, 1832; Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie, 1833; Vorlesung über die Philosophie der Geschichte, 1837. このテーマについては: Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 33-36; Mostert, Luther III, S. 574f.; Lohse, Martin Luther, S. 225.

教的神を「絶対精神 (der absolute Geist)」とみなし、したがって信仰とは精神の自己自身への回帰 (das Zu-sich-selbst-Kommen des Geistes) であると表現したのである。このように、ヘーゲルは精神性、自立性という観念論的観点からする解釈を提出し、真理の器官 (Organ der Wahrheit) であろうとする精神の役割がルターにおいて成就され、ルターは歴史において精神の決定的な前進をなしたのだと理解したのである。

近代のこの潮流の中で、ロマン主義の提出したルター解釈は特異な位置を占めるといえるだろう<sup>5</sup>。ノヴァーリス (Novalis) は『キリスト教世界あるいはヨーロッパ (Die Christenheit oder Europa)』<sup>6</sup>において、教皇の下に統一された中世を理想像として描き出し、それに対して宗教改革を暗黒の出来事と表現した。もっとも、統一の破壊そのものは直接的には宗教改革ではなく、中世末期のカトリック教会の墮落に起因するものと見なされる。しかし宗教改革のもたらしたキリスト教の分裂は啓蒙主義とフランス革命を結果し、それによって近代の不信仰を引き起こしたと批判されるのである。こうしてルターは、教会の統一とヨーロッパ世界との破壊者と位置づけられる。彼のこのルター理解はロマン主義において支配的となり、後期ロマン主義者の中にはカトリックの再興を要求する者も現れ、フリードリヒ・シュレーゲル (Friedrich Schlegel) やアダム・ミュラー (Adam Müller) のように、自身がカトリックへ改宗してゆく者も現れたのである<sup>7</sup>。

<sup>5</sup> このテーマについては、以下を参照：Bornkamm, *Luther im Spiegel*, S. 36-41 ; Mostert, *Luther III*, S. 573 ; Lohse, *Martin Luther*, S. 225f.

<sup>6</sup> Novalis, *Die Christenheit oder Europa*, 1799.

<sup>7</sup> もっとも、ノヴァリス自身は中世のキリスト教の再生をカトリック教会の復興ではなく、新しい包括的な宗教改革に望んだ。

以上に見た近代のルター理解は、当時の政治状況の中でさらなる解釈の展開をもたらすことになった。19世紀初めのナポレオンの支配とそこからの解放という政治過程の中で、ルターをドイツ民族の精神の化身、またドイツ国家の英雄とする理解が生まれ、これが社会に定着することになったのである。この理解は文学的、文化的活動を通じてさらに強められてゆき、1817年の宗教改革記念祭において最高潮に達した<sup>8</sup>。さらに、1830年の七月革命以降は革命との関連で解釈がなされ、啓蒙主義的、合理主義的な精神の自由という観点から、革命を宗教改革の子（*Tochter der Reformation*）とする理解が提出された<sup>9</sup>。そして1848年前後には、保守派、革命派の両サイドから異なったルター解釈がなされることになる。保守派は政治権力に対する服従についてのルターの発言を引き合いに出し、一方、革命派、特にエンゲルスやマルクスは、教皇や皇帝という封建権力への戦いにおいてルターが革命家としての役割を果たしたことを強調した<sup>10</sup>。もっとも、農民戦争に対するルターの態度については、後者より領主の僕と批判されることになる。

以上に見たように、19世紀前後の時代、ルターは多様な思想的観点から様々に解釈され、それによって世俗化の進みつつある近代社会の中で、なお大きな影響力をもつものとして受容されていった。その

---

<sup>8</sup> Bornkamm, *Luther im Spiegel*, S. 52-77; Mostert, *Luther III*, S. 573, 575; Lohse, *Martin Luther*, S. 228f.

<sup>9</sup> Heine, *Heinrich, Die Romantische Schule*, 1833.

<sup>10</sup> Bornkamm, *Luther im Spiegel*, S. 52-77; Mostert, *Luther III*, S. 573, 575; Lohse, *Martin Luther*, S. 228f.

一方、この時期のプロテスタント神学においては、重要なルター研究は長らく提出されなかった。これは、当時の神学が時代精神に大きく規定されていたことによる。すなわち、神学においても、ルター自身との神学的な取り組みよりも、ルターを時代の中に活性化させることを重視する傾向が見られたのである<sup>11</sup>。

シュライアーマッハーについても、このことが当てはまる。彼にとってルターはそれほど意味をもたず、その関心はヘーゲルやフィヒテラの観念論哲学者たちほどもなかったとされている<sup>12</sup>。その理由は、彼の神学の傾向にあると理解されている。すなわち、そのロマン主義的な神学は、罪理解やキリスト論においてルター神学と大きな相違を示し、共有点を見出しにくいのである。もっとも、シュライアーマッハーも、教会の浄化という観点から宗教改革を評価し、彼の新しい神学プログラムを強化するためにルターを引き合いに出した。すなわち教会や大学政治の問題への取り組みの中で、教会会議や長老会制度を導入し、また実践神学や教会法を復活させること、あるいは大学における教育や学問の自由について主張していったのである。もっともその際にも、シュライアーマッハーはルターを引用するにとどまり、神学的な取り組みは行っていない。そして、最終的には民族精神の観念に基づきつつ、宗教改革をゲルマン的な現象とする理解を提出したのである<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 77f.

<sup>12</sup> Lohse, Martin Luther, S.226f. ; Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 78f. ; Mostert, Luther III, S. 574.

<sup>13</sup> Schleiermacher, Friedrich Daniel, Die christliche Sitte nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche, in : Sämtliche Werke 1. Abt. Bd. 12, S. 138f, 206.

教会史家のバウアー（フェルディナント・クリスティアン Ferdinand Christian Baur）についても同様に、神学的な取り組みの欠如が指摘されている。バウアーはランケの影響を受けて、歴史的視点をもってルターと宗教改革の歴史を描き、合理主義的、観念論的な曲解に対して、ルターの宗教的契機を明らかにした。しかし、彼は根本においては、宗教改革をヘーゲルのカテゴリーをもって解釈し、宗教改革は精神が客観性から自己自身へ帰り、真の自由と主観性の原則を意識することを始める「偉大な転換点」であると理解した<sup>14</sup>。そうして彼は、ルターの中に「真のドイツ人」を見る解釈を提出したのである<sup>15</sup>。

### 3. 自由主義神学におけるルター研究

#### 1) アルブレヒト・リッチェルとリッチェル学派

プロテスタント神学における本格的なルター研究は、19世紀の後半になって自由主義神学によって始められた。これには、ルターの全著作を初めて歴史批評的に校訂したエルランゲン版の出版（1826-57年）も、大きな弾みを与えたと言えよう。しかしそれ以上に新しいルター研究を促したのは、方法論そのものの発展であった。これによって、ルターの著作との学問的な取り組みが初めて可能となったのである。この新しい方法をもって、長らく後退していた「神学的」なルター研究が再び始められ、その結果、ルター神学の意義が新たな仕方で評

<sup>14</sup> Bauer, Ferdinand Christian, Die christliche Lehre von der Versöhnung, 1838.; Geschichte der christlichen Kirche, 1863.

<sup>15</sup> Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 79-81.



価されることになったのである<sup>16</sup>。

この新しい研究の端緒を開いたのは、アルブレヒト・リッツェル (Albrecht Ritschl) であった<sup>17</sup>。その成果は、彼の著書『義認と和解 (Die christliche Lehre von der Rechtfertigung und Versöhnung)』<sup>18</sup>と『敬虔主義の歴史 (Geschichte des Pietismus)』<sup>19</sup>の中に明らかである。これらの研究において、彼は教義や神学概念を歴史的、実証的な考察方法に基づいて理解することを提唱し、ここから「教義史 (Dogmengeschichte)」の概念を提出した。すなわち彼は、キリスト教の歴史の中で伝承されてきた教理や神学が歴史的に規定されていることを示し、このことを認識することによって神学を教条主義と思弁から解放することを試みたのである<sup>20</sup>。そしてこの歴史的な考察方法に基づいて、彼はルターの把え直しを始めたのである。

この歴史的考察とは具体的に、宗教改革を中世末期と近代との連関の中に置き、ルター神学をこのコンテキストの中で捉えようとするものであった。そしてそれは、新たなルター理解の視点をもたらすものとなる。すなわち、一方では、恵みによる罪人の救いを強調するルターの義認論が中世の神学との対立において、すなわち思弁的形而上学と神秘主義の克服という観点において、その神学史的意義を確認される

<sup>16</sup> Lohse, Martin Luther, S. 229.

<sup>17</sup> Jacobs, Manfred, Liberale Theologie, in: Theologische Realenzyklopädie, Bd. 21, 1991, S. 47-68, ここでは S. 53; Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 83; Mostert, Luther III, S. 577; Lohse, Martin Luther, S. 229.

<sup>18</sup> Ritschl, Albrecht, Die christliche Lehre von der Rechtfertigung und Versöhnung, 3Bde. 1870-74.

<sup>19</sup> Ders., Geschichte des Pietismus, 3Bde. 1880-1886.

<sup>20</sup> Ders., Die christliche Lehre von der Rechtfertigung und Versöhnung, Bd. 2, S. 1f., 23.

ことになる。しかし同時に、彼の歴史的考察はルターの神学が中世の神学に深く根ざしていることを明らかにし、宗教改革的とされる彼の神学が同時にカトリック的性格を有するものであることを指摘したのである<sup>21</sup>。これは特にルターの「隠された神」の理解にあてはまり、ここにおいて唯名論との関連が確認されることになった。リッチェルのこのような歴史的な考察は、その後のルター研究を方向付ける新たな視点を提出し、後続の自由主義神学者たちによって、また1960年代以降の研究によって、さらに深められてゆくことになる。

もっとも、リッチェルの場合、ルターの神学を歴史的に考察するに留まらず、このルター解釈をもって時代の問いに一つの答えを与えようとする意図が見られ、それが最終的には徹底した歴史的考察を妨げるものとなった<sup>22</sup>。彼の大きな関心は、彼の周囲にあった物質主義的、経験主義的な近代の自然科学と哲学を克服することであり、これらに対し、キリスト教信仰に基づいて、自然と社会に対する人間の優位性を示そうとしたのである。このような視点は、ルターの義認論の解釈において恵みや赦し、あるいは生や幸いの要素を際立たせるものとなり、ここから世界への解放や世界に対する人間の優位性が導き出された。そしてさらにここから、世界に対する責任、すなわち国家、職業、

---

<sup>21</sup> Ebd. Bd. 1, Kap. 3, 4.

<sup>22</sup> この問題については、以下の研究を参照：Hofmann, Frank, Albrecht Ritschls Lutherrezeption (Die Lutherische Kirche, Geschichte und Gestalten, Bd.19), Gütersloh 1998, S.259-261.; Kuhlmann, Helga, Die theologische Ethik Albrecht Ritschls (Beiträge zur evangelischen Theologie, Bd. 1 12), München 1992, S. 262-266; Trillhaas, Wolfgang, Albrecht Ritschl, in: Martin Greschat (Hrsg.), Theologen des Protestantismus im 19. und 20. Jahrhundert, Bd. 1, Stuttgart 1978, S. 113-129, ここでは S. 118-122.

学問における責任の思想が引き出されたのである<sup>23</sup>。ここにおいて、ルター神学の本質的な契機である神の怒りや裁き、ラディカルな罪理解、すなわち律法と福音の弁証法的視点への考察は後退を余儀なくされることになったのである。このようなルター理解の問題性は、特にテオドシウス・ハルナック（Theodosius Harnack）によって指摘され、厳しい批判を受けることになった<sup>24</sup>。そしてこの近代的な視点の入り込んだ解釈は、後のリッチェル学派にも特徴的な志向として受け継がれてゆくことになる。

歴史的、批判的考察が不徹底であることの批判は免れないにせよ、リッチェルの研究がルター研究にもたらした成果は過小評価されてはならないだろう。彼は当時の多様なルター理解を前に、ルターを再びキリスト教的、神学的次元に戻し、しかも、なお粗いものとは言え、その歴史的考察をもって、その後の歴史研究の基礎を築いたのである<sup>25</sup>。

<sup>23</sup> Ritschl, *Geschichte des Pietismus*, Bd. 1, S. 38-60.

<sup>24</sup> Harnack, *Theodosius, Luthers Theologie mit besonderer Beziehung auf seine Veröhnung- und Erlösungslehre*, 2Bde. 1862, 1886.

ハルナックはルター神学の中心は神理解にあると捉え、律法と福音の弁証法における、また裁きと恵みの並存における和解の出来事を強調した。義認論は一面的に恵みにのみ基づくのではなく、キリストの十字架の死に基づいて理解されるべきであり、怒り、隠された神も同様に重視されるべきであると主張した。ハルナックの研究は組織神学的考察に基づいており、そこには歴史的視点が十分でないとはいえ、深い洞察によりルター神学の核を取り出すことに成功したものと評価されている。にも拘らず、彼の著作は一リッチェルとは対照的に、近代的思考に距離をおいたそのあり方ゆえに、当時は大きな影響力をもつものとはならなかった。彼の著作は、1927年になってから、近代的思考の支配を問題にした弁証法神学者によって、新たに出版されることになった。その後、彼のこの著作は「19世紀のもっとも重要な神学的ルター研究」(Bornkamm, *Luther im Spiegel*, S. 82)として高く評価され、今日の歴史的な研究の基準からしても、なお正当なものと考えられている。(Hofmann, *Albrecht Ritschls Lutherrezeption*, S. 227-235.)

<sup>25</sup> リッチェルの再評価については：Richmond, James, *Albrecht Ritschl. Eine Neubewertung* (Göttinger Theologische Arbeiten, Bd. 22), Göttingen 1982, S. 13-37; Kuhlmann, *Die theologische Ethik Albrecht Ritschls*, S. 23, 58-65.

リッチェルの歴史的考察方法は、彼の弟子たちに受け継がれていった。なかでもアドルフ・フォン・ハルナック（Adolf von Harnack）はルターの神学史的意義をより明確な形で提示することを試みた<sup>26</sup>。彼の場合も、リッチェルと同様、歴史的視点をもって考察することにより、教義の時代的制約性を明らかにすることを、その研究の目的とした。そしてこのような歴史的、批判的考察を通して、教会を教条主義から解放しようとしたのである。彼のこの研究は、その『教義史綱要（Lehrbuch der Dogmengeschichte）』<sup>27</sup>と『キリスト教の本質（Das Wesen des Christentums）』<sup>28</sup>の中に示されている。そして、その歴史的、批判的な考察の結果、彼は教義史について以下のような理解を提出することになる。すなわち、教義史は2世紀にギリシア的土壌の上に、福音のヘレニズム化をもって始まり、それは4,5世紀に最高潮に達し、そして宗教改革をもって終結したと理解されるのである。そして福音の素朴さという観点から、この教義史は墮落（Verfall）の歴史と扱われ、三位一体やキリストの両性といった古い教義を堅持したルターと宗教改革は問題とされたのである。すなわちハルナックにとって、ルターは古い教義の再建者であり、古代カトリック教会と中世に連なるものとして、両者の関係性が強調されたのである<sup>29</sup>。彼の歴史的考察はこのように、カトリシズムとの断絶を強調するそれまでの理解に

<sup>26</sup> Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 84 ; Kantzenbach, Harnack, Adolf von, S. 451, 455f. ; Schneemelcher, Wilhelm, Adolf von Harnack, in : Martin Greschat (Hrsg.), Theologen des Protestantismus im 19. und 20. Jahrhundert, Bd. 1, Stuttgart 1978, S. 198-212, ここでは S. 201, 206-208.

<sup>27</sup> Harnack, Adolf von, Lehrbuch der Dogmengeschichte, 3Bde. 1886-90.

<sup>28</sup> Ders., Das Wesen des Christentums, 1900.

<sup>29</sup> Ders., Lehrbuch der Dogmengeschichte, Bd. 1, S. 28. ; Bd. 3, S. 809-814, 823f., 831-834 ; ders., Das Wesen des Christentums, S. 182f.

対して、両者の連続性を浮き彫りにするものとなった。これが「伝統的ルター神学からの決定的な解放」<sup>30</sup>を目指して出した彼の答えであった。しかし、このカトリシズムとの連続性を強調する彼の理解は、ルター神学の新しさや独自性についての考察を欠くものとなり、ここに歴史主義の問題が指摘されることになった<sup>31</sup>。ハルナックもルターと宗教改革の宗教的意義は評価するのであるが、その歴史的考察はルター神学への深い洞察を欠き、そのことによって何よりも彼の父、テオドシウス・ハルナックが提出した神学的ルター理解に対立するものとなったのである<sup>32</sup>。

以上のように、リッチェルとリッチェル学派はその歴史意識をもって、より正確にルターを理解しようと試み、それによってルターの歴史的考察という成果を残した。はからずも彼らの近代的文化意識が最後にはルターとの内的距離をもたらすことになるが<sup>33</sup>、そのような難点にも拘わらず、リッチェルによって新たに開かれた宗教改革研究の意義は、過小評価されてはならないだろう。それは、リッチェル学派を超えて歴史的、批判的研究の道を開いていったのである。なかでもリッチェルの弟子、エルンスト・トレルチとアドルフ・フォン・ハル

<sup>30</sup> Kantzenbach, Friedrich Wilhelm, Harnack, Adolf von, in: Theologische Realenzyklopädie, Bd. 14, 1985, S. 450-458, ここでは S. 451.

<sup>31</sup> Kantzenbach, Harnack, Adolf von, S. 453, 456; Schäfer, Rolf, Ritschl, Albrecht/Ritschlsche Schule, in: Theologische Realenzyklopädie, Bd. 29, 1998, S. 220-238, ここでは S. 232f.; Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 84.

<sup>32</sup> 注 24 を参照。

<sup>33</sup> Hofmann, Albrecht Ritschls Lutherrezeption, S. 261f.; Lohse, Martin Luther, S. 230.; Kantzenbach, Harnack, Adolf von, S. 453, 456.; Schäfer, Ritschl, Albrecht/Ritschlsche Schule, S. 232f.

ナックの弟子、カール・ホルが、宗教改革の歴史的考察をさらに進めることになる。

## 2) エルンスト・トレルチ

宗教史学派の中から、ルターと宗教改革についてより徹底した歴史的考察が提出されることになった。エルンスト・トレルチ (Ernst Troeltsch) は、宗教史学派の他の神学者たちと同様、師リッチェルや同志カフタンへの批判的態度をもって、その神学研究を始めた。彼がなかでも批判したのは、リッチェルらがその歴史意識にも拘らず、人間イエスに結びつけられた超自然的な救済の啓示の教理を保持したことである。歴史批評の方法を厳格に適用しようとしたトレルチにとって、このような超自然的な理解の仕方は歴史的考察としての不徹底さを意味するものに他ならず、彼はこれを克服することを自らの課題とした。そして彼は方法論についての考察を行い、歴史的方法を神学との関連の中で位置づける最初の試みを提出したのである<sup>34</sup>。

1900年に出された「神学における歴史的方法と教義的方法 (Über die historische und dogmatische Methode in der Theologie)」<sup>35</sup>において、トレルチは神学的方法としての二つの方法、すなわち歴史的方法と教義的方法について考察した<sup>36</sup>。ここで彼はこの二つの方法を対立的なものとして捉え、これまで顧みられることのなかった歴史的方法が今

<sup>34</sup> Drescher, Hang-Georg, Ernst Troeltsch. *Leben und Werk*, Göttingen 1991, S. 155-160, 166.

<sup>35</sup> Troeltsch, Ernst, *Über die historische und dogmatische Methode in der Theologie* (1900), in: ders., *Gesammelte Schriften*, Bd. 2, Tübingen 1913, S. 729-753.

<sup>36</sup> 以下の叙述については: Troeltsch, *Über die historische und dogmatische Methode in der Theologie*, S. 731-736, 744f.

やキリスト教のあらゆる領域に適用されるべきことを主張した。その際、この歴史的方法を特徴づけるものとして、彼は3つの要素を提示する。すなわち、歴史批評、類推の適用、歴史現象の相互作用の認識である。トレルチは、まず伝承の特性が認識され、それに続いて全体的な関連性が問われることを要求した。そしてこのような歴史的、批判的方法が徹底して適用されるのであれば、あらゆる現象の相対性、不確実性が認識されることになると言う。そしてこのような考察は、最終的にはキリスト教の歴史を絶対的な評価から解放し、相対化するに至ると述べるのである。これによって、救済史における唯一性の主張とキリスト教の完結性の観念が否定されることになるのである。

このような方法論に基づいて、トレルチはプロテスタント神学と教会の歴史を多様な文化的諸連関の中に把握することを試みた。そして宗教改革もまた、このような諸連関の中にその姿を明るみに出すことが求められたのである。そのために、トレルチは宗教改革を中世と近代への歴史的諸連関の中に置いて考察を行い、その結果、宗教改革は中世的な現象であったとする理解を提出したのである<sup>37</sup>。というのは、ルターの神学における信仰の強調は、中世的な救いの確かさの問いに対する一つの答えであったとされるからである。またルターが教会を純粋な神的「救済機関」とする理解をもち、「キリスト教共同体 (corpus christianum)」や「禁欲」の概念を有していたことも、中世との連続性を示すものとして指摘される。宗教改革はその救済論において解釈

---

<sup>37</sup> 以下の叙述については：Troeltsch, Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt, (Historische Bibliothek, Bd. 24.) München, Berlin<sup>2</sup>1911 (<sup>1</sup>1906) ; ders., Luther und die moderne Welt, 1908, in : ders., Gesammelte Schriften, Bd. 4, (Hrsg.) Hans Baron, Tübingen 1925, S. 202-254.

を新たに提出したとはいえ、このような仕方でもカトリック的概念を継続させたとして理解されるのである。そしてその限りにおいて、宗教改革は「カトリシズムの改造 (Umbildung des Katholizismus)」<sup>38</sup>に過ぎないとする解釈が提出されたのである。このような理解に基づき、トレルチは宗教改革と近代世界の直接的な関連を否定した。というのは、近代世界は中世世界とは対照的に、自らの自律を主張し、教会と国家の関係を問題にするからである。その一方でトレルチは、宗教改革的思考の中には、信仰の宗教、宗教的個人主義、心情倫理、世界への開放性といった概念が内包されており、ここに近代的要素が認められることをも指摘する。これらの概念は、やがて内在原理、自律原理、あるいは自由の思想といった近代文化の基礎を形成するものとなったと理解するのである。しかしその際、それらが直接的に近代へ至ったわけではなく、進展しつつある近代的生に対して、「無意識に」「間接的に」影響を及ぼしたと、トレルチは限定的に理解する<sup>39</sup>。

その際、トレルチはとりわけルターの倫理に注目した<sup>40</sup>。すなわち、ルターはその「内的心性 (Gesinnungsinerlichkeit)」に基づいて徹底的な愛の倫理を主張したが、現実の生活ではそれは貫徹し得ず、それゆえ彼は世俗的な生活秩序、すなわち社会的、国家的生活秩序におい

---

<sup>38</sup> Troeltsch, Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt, S. 32.

<sup>39</sup> これらの問題については、以下の論文を参照：Drescher, Ernst Troeltsch, S. 226-238, 243-253；Gäbler, Ulrich, Drei Typen theologischer Lutherdeutung um 1920. Ernst Troeltsch, Reinhold Seeberg, Karl Holl, in：Ferdinand van Ingen und Gerd Labrousse (Hrsg.), Luther-Bilder im 20. Jahrhundert. Symposium an der Freien Universität Amsterdam, Amsterdam 1984, S. 187-197, ここでは S. 187f.

<sup>40</sup> 以下の叙述については：Troeltsch, Das soziologische Problem des Protestantismus (1909), in：ders., Gesammelte Schriften, Bd. 1, Tübingen 1912, S. 427-512.



ては妥協を余儀なくされたとトレルチは理解する。その結果、ルターは職務における外的道徳と個人における内的道徳という二重の道徳を展開することになったことを、トレルチは指摘する。すなわち、この「世界に無頓着な」倫理においては、世界の事柄は自然法と理性に委ねられ、一方、内的キリスト者には信仰と隣人愛が要求されることになったというのである。トレルチはさらに、この倫理が現実の歴史の中で政治権力を強める効果をもたらし、それによって絶対主義を招く結果をもたらしたと理解するのである<sup>41</sup>。

このように、トレルチはルターと宗教改革をその歴史的連関の中に捉えようと試み、その結果、ルターと宗教改革を相対化する視点をもたらした。それは、歴史的、批判的方法を神学において徹底的に適用しようとする試みであり、彼自身の方法論的な考察に基礎付けられたものであった。もっともトレルチの場合も、リッチェルやハルナックと同様、その歴史的分析が近代的、文化史的な問題設定に規定されていることを指摘しなくてはならない。たしかに、トレルチはルターの根本動機が宗教的、神学的なものであることを認め、彼を宗教的天才と表現したが、上述の考察に示されるように、宗教的個人主義や世界への開放性の萌芽を読み取ろうとするルター理解、宗教改革理解は彼の啓蒙主義的志向に規定されていることが見て取れよう。彼の関心は、最終的にはプロテスタンティズムが近代世界にもたらした作用を確認

---

<sup>41</sup> この問題については、以下を参照：Bornkamm, *Luther im Spiegel*, S. 108f.; Gäbler, *Drei Typen theologischer Lutherdeutung um 1920*, S. 188f.; Rendtorff, Trutz, Ernst Troeltsch, in: Martin Greschat (Hrsg.), *Theologie des Protestantismus im 19. und 20. Jahrhundert*, Bd 2, Stuttgart 1978, S. 272-287, ここでは S. 282.

することにあつたと言い得るのである<sup>42</sup>。まさにこの近代的な解釈ゆえに、彼の理解はヴィルヘルム・ヘルマン（Wilhelm Herrmann）やカール・ホル（Karl Holl）らによって批判されることになったのである。トレルチのこの問題設定は、それゆえ来たるべき革新運動—すなわち弁証法神学—によっては顧みられず、むしろ社会学の領域において大いに注目されることになった。もっとも、トレルチに対してなされた「文化的プロテスタント」という批判は、適切なものとは言えないだろう。というのも、彼は宗教の次元の特殊性を放棄することなく、宗教が文化に関係させられる様子を明らかにしようとしたからである。

### 3) カール・ホル

この自由主義神学の潮流のなかで、歴史的、そして神学的考察に基づいたルター研究が、20世紀初めになってカール・ホル（Karl Holl）によって提出された。彼はルター神学についての概説を著すことはなかったが、個別研究によって完結したルター理解を提出し、それによってルター研究を切り開く決定的な契機を与えることになった。その際、1883年以來のワイマール版の出版が、大きな役割を果たしことは言うまでもない。ここではルターの著作全体が年代順にまとめられ、それまで知られていなかった資料、とりわけ詩編講義（1513-1515年）やロマ書講義（1515/1516年）など初期の講義が紹介されることになった。そして、これらがルターの初期神学の歴史研究を促進し、ルターの根本動機を問うてゆく可能性を開いたのである。他方、ホルの優れ

<sup>42</sup> Drescher, Ernst Troeltsch, S. 166, 229, 239, 246f., 257, 486; Lohse, Martin Luther, S. 233.; Rendtorff, Ernst Troeltsch, S. 284.

た研究の背景には、時代の問題との取り組みがあったことも、指摘されるべきであろう。第一次世界大戦の政治的、また神学的に危機的状況の中で、ホルは自らの信仰的視点をもって研究を進めた。そして、その取り組みの結果、歴史的視点をもちながらも深い神学的な洞察に基づいたルター研究がもたらされ、それが大きな反響を呼ぶものとなったのである<sup>43</sup>。

ホルは自由主義神学の出身で、ハルナックとユーリヒャー（アドルフ、Adolf Jülicher）の弟子であり、ここから歴史批評の方法を受け継いだ。そしてこの方法論をもって彼はルターに向かい、個々の文献にあたってルター神学の歴史的展開を追ったのである。その際、彼の関心は、ワイマール版の、特に1908年のロマ書講義の出版により着目されたばかりの初期ルターの問題に向けられた。ここに彼はルターの宗教的経験を新たに発見し、それによって信仰義認論は初期ルター神学にあっても、その中心に位置するという理解を提出することになったのである。このような理解は、ホルの歴史的考察のみならず、彼の精神的同質性によって可能になったと指摘される（ローゼ）<sup>44</sup>。すなわちそれをもって、歴史資料の中からルターの宗教的動機を読み取ることがはじめて可能になったと認識されたのである。こうしてホルは、

---

<sup>43</sup> Wallmann, Johannes, Karl Holl und seine Schule, in: Zeitschrift für Theologie und Kirche, Beiheft 4, 1978, S. 1-33, ここでは S. 20f.; ders., Holl, Karl, in: Theologische Realenzyklopädie, Bd. 15, 1986, S. 514-518, ここでは, S. 516f.; Gäbler, Drei Typen theologischer Lutherdeutung um 1920, S. 194f.; Bodenstein, Walter, Karl Holl, in: Martin Greschat (Hrsg.), Theologie des Protestantismus im 19. und 20. Jahrhundert, Bd. 2, Stuttgart 1978, S. 256-271, ここでは S. 257, 264; Rückert, Hanns, Karl Holl †23. Mai 1926 (1926) in: ders., Vorträge und Aufsätze zur historischen Theologie, Tübingen 1972, S. 361-368, ここでは S. 360f., 366-368.

<sup>44</sup> Lohse, Martin Luther, S. 234f.

ルター神学の進展を歴史的に跡づけつつ、他方、彼の神学を組織神学的に表現することに成功しえたとは評価されたのである<sup>45</sup>。

ホルのこの歴史的、神学的考察の成果は、特に彼の論文「ルターは宗教の下に何を理解したか (Was verstand Luther unter Religion?)」<sup>46</sup>「ルターの 로마書講義における信仰義認論—救いの確信の問題を顧慮しつつ—(Die Rechtfertigungslehre in Luthers Vorlesung über den Römerbrief mit besonderer Rücksicht auf die Frage der Heilsgewißheit)」<sup>47</sup>において明らかにされた。ここで、ホルは初期ルターの信仰義認論を特に神の人間に対する関係という視点から考察し、ルターの宗教的動機を明らかにした。すなわち、神の前で人間は十分になしえない厳しい命令に向かいあっており、良心において人は神の怒りを、すなわち心の試練と絶望を経験する。そしてこの挫折の経験の中で、人は信仰において無条件の神の恵みに出会い、赦しと解放を認識するという宗教的な経験が生起することを、ホルはルターの信仰義認論の中に読み取った。そしてこの裁きと恵みの神の経験が、初期ルターの宗教的契機であると理解したのである<sup>48</sup>。このような神中心的な神学構造をもって、ホ

<sup>45</sup> Wallmann, Karl Holl und seine Schule, S. 16, 18f. 21-24; ders., Holl, Karl, S. 516f.; Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 114f.; Mostert, Luther III, S. 577; Bodenstein, Karl Holl, S. 257f.; Gäbler, Drei Typen theologischer Lutherdeutung um 1920, S. 194; Rückert, Hanns, Karl Holl (1968), in: ders., Vorträge und Aufsätze zur historischen Theologie, Tübingen 1972, S. 369-373, hier, 369, 371.

<sup>46</sup> Holl, Karl, Was verstand Luther unter Religion? (1917), in: ders., Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Bd.1, Luther, Tübingen <sup>6</sup>1932 (<sup>1</sup>1921), S. 1-110.

<sup>47</sup> Ders., Die Rechtfertigungslehre in Luthers Vorlesung über den Römerbrief mit besonderer Rücksicht auf die Frage der Heilsgewißheit, in: ders., Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Bd. 1, S. 111-154.

<sup>48</sup> Holl, Was verstand Luther unter Religion?, S. 35-84.; ders., Die Rechtfertigungslehre in Luthers Vorlesung über den Römerbrief mit besonderer Rücksicht auf die Frage der Heilsgewißheit, S. 114-117, 129-134.

ルはルター神学の一貫性を提示し、初期ルターと後期ルターの相違を指摘する一般的な見解に対立したのである<sup>49</sup>。

その際、ホルは「宗教改革の文化的意義 (Die Kulturbedeutung der Reformation)」<sup>50</sup>についても考察を行い、ルターの信仰義認論の倫理的帰結を強調した。すなわち、赦しを経験した人間が、同時に信仰において新たな生の力を受け、愛の戒めに基づいて律法から解放されて、再び世界に生きようとするルターが理解している点にホルは着目した。そしてここから、ルターは世界の生の秩序をキリスト教者の義務とし、包括的な政治的、経済的、社会的、そして個人的倫理の基礎付けを行ったとする理解を提出したのである<sup>51</sup>。

このように、ホルはルター神学と倫理が神律的に規定されていること (die theonome Definition) を明らかにし、ここから当時のルター理解を批判した<sup>52</sup>。なかでも彼が批判したのは、トレルチの理解であった。すなわち、トレルチがルターの倫理の中に二重の道徳と自然法の契機を認めたことに対し、ホルは愛の戒めに基づいた一元的なルターの倫理を指摘した。それに応じて、ルターの倫理がドイツの政治史に影響をもたらしたとするトレルチの見解も、ホルは問題として退けた。また中世に対する宗教改革の関係についても、ホルは両者の連続性を主張するトレルチに対して、中世を崩壊させた宗教改革の意義を強調したのである。

<sup>49</sup> Wallmann, Karl Holl und seine Schule, S. 23f. ; ders., Holl, Karl, S. 516f. ; Bodenstein, Karl Holl, S. 265.

<sup>50</sup> Holl, Die Kulturbedeutung der Reformation (1911), in: ders., Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Bd. 1, S. 468-543.

<sup>51</sup> Ebd., S. 468-486, 500, 508f.

<sup>52</sup> Holl, Die Kulturbedeutung der Reformation, S. 481-483.

ホルの行ったこのルター神学の新たな考察と発見は、当時のプロテスタント神学に大きな意味をもつものとなった。というのは、ホルはその神中心的な構造を明らかにすることによって、自由主義神学のルター理解の問題点を克服し、決定的にそこから脱却したと理解されたのである。これによって、ホルのルター研究は当時のプロテスタント神学に大きな刺激を与え、第一次大戦後の神学の革新運動、なかでもルタールネサンスの運動の展開に、一つの契機を与えるものとなったのである<sup>53</sup>。

もっとも、ホルの分析はなお近代の問題設定に規定されていることが、以上の叙述にすでに明らかであろう。このことは特に、信仰義認論を倫理的当為の契機において捉え、そこから「義務」を引き出す彼の解釈の中に明らかである。これは、彼においてさらに一人が神と出会う場としての一「良心 (Gewissen)」の概念をもたらし、また信仰義認論の解釈に「道徳性 (Sittlichkeit)」の概念を導入するに至り、最終的にはルターの宗教を「良心の宗教 (Gewissensreligion)」と表現する結果となったのである<sup>54</sup>。

ここでも、リッチェルやトレルチと同様、やはり「ルターの近代化」の問題が指摘されねばならないだろう。実際、この道徳的要素は弁証

---

<sup>53</sup> Wallmann, Holl, Karl, S. 51; ders., Karl Holl und seine Schule, S. 20; Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 118; Lohse, Martin Luther, S. 235; Assel, Heinrich, Der andere Aufbruch. Die Lutherrenaissance-Ursprünge, Aporien und Wege: Karl Holl, Emanuel Hirsch, Rudolf Hermann (1910-1935), Göttingen 1994, S. 15, 61, 469. その際、そのルター解釈をもってルタールネサンスに端緒を開いたホルと、彼のルター解釈を穏健化したホル学派、そして包括的神学運動としてのルタールネサンスの三者は区別して理解されねばならない。(Assel, Der andere Aufbruch, S. 61.)

<sup>54</sup> Holl, Was verstand Luther unter Religion, S. 25, 30; ders., Der Neubau der Sittlichkeit (1919), in: Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Bd. 1, S. 155-287.

法神学によって厳しく批判されることになった。さらに問題なのは、ホルがルターをドイツ史の一つの原型と理解し、民族的視点からの解釈を行ったことである<sup>55</sup>。もちろんホルの元来の意図は神学的、教会的なものであり、前述の1917年の論文「ルターは宗教の下に…」では、なお国家主義への批判的態度が見られる。しかし1923年にはルターの精神に基づいて民族教会（Volkskirche）を改革することを述べており、これは当時の状況の中では、国家主義への支持と理解されるものである。ホルの弟子の中には、ルターの精神をもってドイツ民族を新たに高揚させようとする理解を受継いだ者もあり、その中の数名はドイツキリスト者の指導的役割を担うものとなった。ここに「カール・ホルのなしたルターの偉大な再発見の悲劇」<sup>56</sup>があったことが指摘されるのである<sup>57</sup>。

これらの問題にも拘らず、ホルが歴史的方法に基づきつつ深い神学的洞察をなしたことは、当時の神学状況の中で大きな意味をもつものであった。彼の「厳格な歴史家と魂を鼓舞する神学者」<sup>58</sup>の視点は、とりわけ彼の弟子、ハインリヒ・ボルンカムに受継がれ、ルター神学の包括的な研究やルター受容史の研究が進展してゆくこととなる。ホルの遺産はしかし、彼の弟子たちの1933年以後の国家社会主義的な態度によって、まずは信用を失い、当時の弁証法神学ほどには大きな影響力を持つことができなかった。ホルの取り組みは、第二次世界大

<sup>55</sup> Holl, Luther und die Schwärmer, 1922.

<sup>56</sup> Assel, Der andere Aufbruch, S. 163.

<sup>57</sup> Lohse, Martin Luther, S.235; Bornkamm, Luther im Spiegel, S. 116; Assel, Der andere Aufbruch, 127-131, 162f.

<sup>58</sup> Gerhard Ebeling, Heinrich Bornkamm 26.6.1901-21.1.1977, in: Jahrbuch des Heidelberger Akademie der Wissenschaften für das Jahr 1978, S. 63-65, ここでは S. 64.

戦後になって初めて、実を結ぶことになるのである<sup>59</sup>。

#### 4. おわりに

以上に見たように、自由主義神学はその歴史的意識をもって、新しいルター研究に道を開いた。それは、ルターの宗教改革を歴史的な文脈の中に置くことにより、従来理解されてきたように、それが中世を克服し、それに対立するものではなく、むしろカトリシズムと連続する要素をもつことを明らかにした。そのことにより、この歴史的考察はルターや宗教改革の相対性を指摘するものとなり、歴史から抽象してルターを教父や預言者とみなし、宗教改革とその神学に絶対的な意味を認める教条的な理解を退けるものとなった。これは伝統的なルター理解に大きな変更を迫った重要な貢献と言えよう。しかし、彼らの解釈の中には近代的な問題意識が入り込み、それが徹底した歴史的、批判的考察を妨げるという限界も、ここには示された。まさにそれゆえに、彼らの研究は人間的な視点からなされるものとして弁証法神学によって退けられることになった。そして宗教改革の歴史的考察は、この時点で進展を止め、それに代わって弁証法神学の視点からする教条的、弁証的ルター研究が再び展開されてゆくのである。そしてルターの歴史的考察は、1960年代になってようやく、弁証法神学の限界を克服しようとする教会史家らによって、その意義を再発見され、進められることになった<sup>60</sup>。ここで改めて、宗教改革と中世の連続性、初

<sup>59</sup> Lohse, *Martin Luther*, S. 236f.

<sup>60</sup> 1960年代以降のルター研究については、以下の拙論を参照：『『歴史的』ルター研究の提唱：ゲルハルト・エーベリンク』（『基督教研究』第71巻第1号，2009



期ルターの問題が問われ、考察が深められてゆくのである。

---

年 6 月, 101-112 頁): 「1960 年代から 1980 年代にかけてのルター研究—歴史研究の展開とその問題」(『基督教研究』第 71 巻第 2 号, 2009 年 12 月, 19-36 頁); 「宗教改革研究における歴史的視点の導入—ベルント・メラ—」(『教会と神学』第 49 号, 2009 年 11 月, 103-140 頁); 「ルター神学研究における歴史的視点の導入—ベルンハルト・ローゼ」(『ヨーロッパ文化史』第 11 号, 2010 年 3 月, 217-244 頁)